About Chinese Cinema "Beijing Bicycle" by Wang Xiaoshuai

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6076

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

王小帥『北京の自転車』について

About Chinese Cinema “Beijing Bicycle” by Wang Xiaoshuai

松　村　茂　樹

はじめに

中国映画第6世代監督の王小帥（ワン・シャオシュアイ）が2000年に制作した『北京の自転車』（中文題『十七歳的単車』）は、台湾の映画評論家・焦雄屏（ペギー・チャオ）プロデュースになる「三城記（三都市物語）」シリーズの1本である[注1]。

北京オリンピック開催決定（2001年7月）直前の経済発展を続ける北京で、自転車をめぐる二人の少年の意識を描いて格差社会の現実を浮き彫りにしたこの作品は、2001年の第51回ベルリン国際映画祭で銀熊賞（審査員特別賞）を、主役の二人の少年を演じた崔林（ツイ・リン）、李濱（リー・ビン）は、共に新人男優賞を受賞したが、中国国内で上映禁止になってしまう。その後、2004年1月、『自行車（自転車）』と題名を変え、上映解禁となるが、公開上映はなされず、2013年7月、初めて国内で特別上映され、同時に、監督や出演者によるイベントも行われた。

本稿では、上映禁止から12年を経ながら、なお注目され、「経典電影（名作映画）」となったこの『北京の自転車』の魅力と意義を分析したい。このことにより、第6世代監督の力量と本質を明らかにできるだろう。

オリジナルストーリー

『北京の自転車』のストーリーは、監督の王小帥およびプロデューサーの焦雄屏によるオリジナルである[注2]。農村から北京に出てきた17歳のグイ（崔林）は、自転車宅配便会社に入り、配達員として働き始める。会社からは単車つまりマウンテンバイクが貸し出され、一定の配達を行えば自分のものに

なるというシステムだった。あと1回の配達でそれが叶うという時、単車は盗まれてしまう。しかも、盗まれたショックで配達を遅延させてしまい、社長に首を言い渡される。単車を見つけて来るから、もう一度雇って欲しいと懇願し、グイは必死で単車を探す。

そしてようやく見つけることができたその単車は、同じ17歳の高校生ジエン（李濱）が乗っていた。ジエンは父に単車を買ってもらうことになっていたが、その約束が果たされず、父の金を盗み、中古車市場でその単車を買っていたのだった。それをグイに見つけられ、持ち去られてしまう。そのショックから、付き合っていたシャオ（高圓圓）に冷たくしてしまい、シャオはダーホアン（李爽）という単車グループのリーダーと付き合い始めてしまう。

ジエンの友人たちは、グイを呼び出して単車をジエンに渡すよう説得するが、もちろんグイはそれに応じず、結局、グイとジエンが一日交代で単車を使うことになる。そんな日が続く中、ジエンは自転車デートをしているシャオとダーホアンを待ち伏せし、レンガでダーホアンの頭を殴る。その後、単車でグイとの待ち合わせ場所に行ったジエンは、もう返さなくていい、お前が使えと言い、単車をグイに渡す。グイが単車で去ろうとする時、ダーホアンとその仲間が単車で追いかけて来る。狭い胡同で、単車に乗るグイはうまく逃げられず、結局、走って逃げるジエンと共に袋小路に追い込まれてしまう。

ジエンと共に、グイもダーホアンらに殴られるが、ダーホアンが引き上げた後も、その仲間の一人が執拗にグイの乗っていた単車を踏みつけていた。耐えかねたグイは、レンガでその少年の頭を殴り、ひしゃげた単車を担いで去っていくのであった。

物質世界と精神世界

『北京の自転車』が描くのは、経済発展した中国の都市に現れた格差の現実である。グイはここでは最下層の象徴となっている。だが、実は都会に出てきたことで、グイはステージを上げているのである。もうグイは決して農村には戻らない。単車を盗まれた後、同郷の雑貨屋の兄貴分が自分の旧式の自転車を貸してくれるが、グイはそれを乗り捨ててしまう。映画は、グイがタバコの味を覚えて行く場面を織り込んでいるが、一度覚えたタバコをやめ

られないように、一度いい単車に乗ると、もう旧式の自転車には乗れないのだ。

ジエンは北京在住の高校生であるが、家は裕福ではなく、親は約束した単車を買ってくれない。高校に合格しても、学年で5番以内の成績を取っても買ってくれなかったというセリフがあるが、ジエンは勉強も単車のためにがんばっていたのである。ジエンは単車が何より大切になっている。だから、単車がなくなり、打ちひしがれている時に、シャオが、たかが自転車、なくしたらまた買えばいいと言ったことで、キレてしまい、彼女を失うのである。

ただ、映画は、共に単車に執着するグイとジエンのレベルをはっきりと区分する。ジエンは、シャオの新しい彼であるダーホアンに屈辱を受け、その報復のためにダーホアンをレンガで殴り、単車をグイに渡す。単車よりも面子や友情を大切にしたのである。つまり、ジエンは物質世界から精神世界に足を踏み入れたということなのだろう。

だが、グイにはその気配が全くない。自転車宅配便会社の社長や社員にののしられ、面子をつぶされても、決して仕事をやめようとせず、ジエンが友情を投げかけて来ても、決してそれに応えようとしない。そしてラストで、単車を守るため、ダーホアンの仲間の頭をレンガで殴ってしまう。言うまでもなく、レンガで頭を殴れば、死んでしまうかもしれない。そこまでしてしまうほど、単車が大切なのだ。つまり、グイの住む世界は物質世界のみであり、精神世界の存在すら知らないのである。

4 層構造の格差社会

グイが最下層（とりあえずA層とする）、ジエンがその上の層（B層）とすると、シャオはそのもう一つ上の層（C層）ということになる。ただ、ジエンとシャオは同じ高校に通う同級生であり、B層とC層は混在していることになる。前述のように、C層にとって単車は「買えばいい」ものであり、ジエンの友人たちも単車を持っていることからC層なのであろう。そもそも2000年の時点で、ブレザーとネクタイの制服を日常的に着用する高校（後述のように日本の学園モノを参考にしているだけなのかも知れないが）は、ある程度の富裕層が行くいわゆる貴族学校であろうから。

ジエンは、このC層の友人たちと付き合っていかねばならないのである。

ゲームセンターで、ジエンばかりがゲーム代を出しているシーンがあるが、これは、ジエンの立場を表している。これら普通に単車を持っている友人たちと対等に付き合うため、どうしても単車が必要であったのだ。

映画には、C 層の上の層（D 層）も出てくる。グイの兄貴分が覗き見る雑貨屋の裏に建つ高級マンションに住む美女（周迅）である。実は、美女は、農村からやってきた使用人で、雇用主の服や靴を勝手に着用し、あげくに売っていたことが明かされる。さすれば、美女は A 層でありながら D 層になりすましていたわけで、A 層の物質的願望の果てしなさが窺える。ただ、彼女は発覚して失踪するわけで、A 層の悲哀の象徴にもなっている。

実際の D 層も登場している。たとえば、グイが集荷に行って迷い込んでしまったスパの客や、グイの雇用主である社長も D 層であろう。映画は、これら A～D の 4 層からなる格差社会を切り取って見せたのである。

第 5 世代のアンチテーゼ

前出のスパの客は、グイが配達を依頼した「張（チャン）さん」のところに行こうとして、結局は人違いであったという場面で登場する。その際、客は、「張芸謀（チャン・イーモウ）だって張だろ」と言う。また、雇用主の社長は、グイが単車を取り戻してきたことを知ると、「『秋菊打官司（秋菊の物語）』並みの根性か」と言う。『秋菊打官司』はもとより、張芸謀監督の映画である。

張芸謀は、王小帥ら第 6 世代監督の前の世代である第 5 世代監督の代表的存在である。第 6 世代の第 5 世代に対する思いに関しては、いくつかの拙稿[注3]中で論じているが、つまるところ、文革傷痕世代たる第 5 世代が下放体験をもとに地方を寓言でもって描いたのに対し、次世代たる第 6 世代は、その真逆である都市の現実を描くことにより、第 5 世代を批判し、中国映画の新たな方向性を模索した。もとより第 6 世代たる王小帥のこの映画も例外ではなく、第 5 世代のアンチテーゼ的側面を有している。その象徴的場面がここで、D 層たるスパの客や雇用主の社長に張芸謀の名を出させることによって、第 5 世代と D 層をオーバラップさせ、第 5 世代が映画界の特権階級になっていることを示唆するのである。

このように、第 5 世代のアンチテーゼであることを鮮明にした『北京の自

転車』は、4層構造の格差社会という都市の現実を見事に描き上げ、第6世代監督映画の白眉となった。当時の第6世代の多くが、ドキュメンタリーまたは実際にあった話の再現という手法にこだわり、ともすれば退屈になってしまう作品が多かった中で、周迅や高圓圓といった華のある女優をあえて使い、当時はまずなかった制服の常時着用(学校では体操服を着ることが多い)により学園モノの雰囲気を出し、そして胡同での自転車追跡シーンなどアクションの要素も取り入れ、決して退屈しない、楽しめる映画になっていることも大きかった。

12年目の上映解禁

かくしてこの映画は、前述のように、ベルリン国際映画祭で銀熊賞と新人男優賞を受賞することになるが、中国国内で上映禁止になってしまった。そして、12年後の2013年7月15、16の両日、北京で特別上映されたのである。16日付『騰訊娯楽』「王小帥被禁作品改名《自行車》12年後国内首映」[注4]は、以下のように報じている（原文中文、筆者翻訳、以下同)。

> 騰訊娯楽報道（文/冬春電影　撮影/張枝摞）昨晩7時ちょうど、王小帥監督による2000年撮影の映画『自行車』(以前の題名は『十七歳的単車』)が当代MOMA百老匯電影中心で特別上映された。12年余の時を隔てた後、この作品が初めて国内の大スクリーンで公開されたのである。チケットは早くに売り切れ、空席はなかった。上映後、監督の王小帥と主演男優の崔林が舞台に上がって観衆と交流し、映画にまつわる当時の思いを分かち合った。
>
> 2001年、王小帥がメガフォンを執り、高圓圓、周迅、崔林、李濱などが主演した『十七歳的単車』はベルリン国際映画祭で審査員グランプリである銀熊賞を獲得し、二人の主役はすばらしい演技で最優秀新人賞を得た。この審査員特別賞は第6世代監督が三大映画祭で得た初めての賞で、第6世代が国際舞台に上がった重要な標識となった。しかしながら、広電総局(国家新聞出版広電総局）の審査手順を経ないで国外の映画祭に参加したため、コアな映画ファンが中国大陸青春映画の代表作とするこの映画は上映禁止になってしまったのである。

2004年、『十七歳的単車』は『自行車』と名を改め、承認を得て、正式に解禁された。ただ、配給にあたり技術面で次々と障害に遇い、いまだ公開上映されていなかった。冬春電影が先週、当時のロケ地で行った「七月、一起騎十七歳的単車（七月、一緒に十七歳の単車に乗ろう）」イベントに続き、埋もれて12年の後、『十七歳的単車』という中国映画史上重要な一筆を留めた名作は、昨日から連続して二日、二回の特別上映がなされたのである。（中略）

王小帥監督は、「私は、とても多くの観衆がこの映画を見てくれ、また何度も見てくれたと信じています。ただ、今日、初めて大スクリーンで見ることができたはずです。私たちもこの方式で皆さんとお会いしたかったのです。自分の労働と苦労は、これだけの人が覚えてくれており、これだけ多くの人が集まってくれたことで、報われました。みなさんありがとう」と演説した。

映画『十七歳的単車』は、二人の少年が一つの単車の争奪をめぐって展開し、十七歳の矛盾、迷い、愛情、生き方、理想と十七歳の少年の現実に対する理解、社会規則に対するぼんやりとした認識と矛盾する問題に対する解決のしかたを充分に現している。

この記事を書いている冬春電影は、王小帥の会社（王小帥のデビュー作『冬春的日子』にちなむ）であり、王小帥の意思が反映されていると思われる。

日本にも及んだ影響

この映画の上映禁止措置は、実は日本にも影響を与えていた。2001年9月14日～24日、福岡で開催された「アジアフォーカス・福岡映画祭2001」で予定されていた上映を中止するよう、中国政府が要請して来たのである。2001年9月8日付『朝日新聞』西部本社版夕刊に、以下のような記事が見える。

「許可していない」　福岡映画祭で中国が上映中止要請

福岡市で14日から開かれる「アジアフォーカス・福岡映画祭」で上映予定の中国映画2作品について、中国政府が駐福岡総領事館を通じて「作

品は当局の上映許可を得ていない」として、市に上映中止を求めていることが８日、わかった。市文化振興課内にある映画祭実行委員会事務局は「配給会社から上映権を得ており、問題はない」と総領事館に上映の意思を伝えた。昨年も、中国側は同様の理由で別の２作品の上映中止を求めたが、予定通り上映された。

中国が上映中止を求めてきたのは、「鬼子来了」（姜文監督）と「北京の自転車」（王小帥監督）の２作品。

「鬼子来了」は、第２次世界大戦末期の中国北部の農村が舞台。昨年５月のカンヌ国際映画祭で審査員特別大賞を受けた。日本人の俳優香川照之も日本兵役で出演。「北京の自転車」は、自転車を巡る２少年の心の動きを描いている。２月に開かれたベルリン国際映画祭で審査員大賞を受賞した。

事務局によると、総領事館は８月下旬、「映画祭など商業目的でない場合の上映には、国家の許可を得た作品を上映すべきだ。２作品は許可を得ていない」と、口頭で中止を求めてきた。だが、事務局は「日本で配給権を持つ映画会社とは正式に契約している」と説明したという。

この２作品は中国国内では上映禁止になっているが、「鬼子来了」は韓国やシンガポールの映画祭でも上映されたという。事務局は「映画を通じてアジアの人々の交流を進めるのが映画祭の目的で、中国側はそうした点を理解してほしい」としている。

〇問題ない

同映画祭ディレクターの映画評論家、佐藤忠男氏の話　これまでにもカンヌ、東京などの国際映画祭で中国が上映中止を申し入れてくることはあった。今回は、正式に輸入して業者が上映権を買い取っているので、上映に問題はないと考えている。なぜ申し入れがあったのか不思議で、納得できない。

ちなみに、『朝日新聞』は、翌日全国版朝刊でも「「福岡映画祭」で中国作品の上映中止を要求 中国政府」との見出しで、このことを簡潔に報じている。

実は、筆者は、『鬼子来了』と『北京の自転車』を観るためだけに福岡行きを予定しており、この記事を読んで不安に思ったが、行ってみると、予定通り上映され、『北京の自転車』上映会場にはプロデューサーの焦雄屏も来

ており、ティーチインも行われた。当時、中国政府の中止要請と聞くと、政治的問題があるものだと思いこんでおり、日中戦争を扱った『鬼子来了』の方はそれらしきことを指摘することはできようが、『北京の自転車』の方はどう観ても政治的問題があるとは思えず、会場の人たちも首を傾げていた。

ただ、今から思えば、上引文中にあるように、中国政府は本当に「許可をしていない」から上映中止を求めていたのかもしれず、政治的問題はもともとなかったのかもしれない。

名誉回復のイベント

前引『騰訊娯楽』「王小帥被禁作品改名《自行車》12年後国内首映」中にあるように、この映画の中国国内上映禁止も、基本的には「広電総局の審査手順を経ないで国外の映画祭に参加したため」であったのだろう。この映画の解禁が認められた翌日の2004年1月2日付『新華網』「王小帥電影被解禁：《十七歲的単車》変成《自行車》」[注5]に、以下のような一節が見える。

> 『十七歲的単車』のカメラマンである劉傑は、記者に対して次のように証言した。「映画は改めて審査に送り、すでに通過しました。ただ象徴的に8つのシーンをカットし、名前を『自行車』に変えました。許可文書は一両日中に下りるでしょう。

「象徴的に」というように、審査に出したからには、当局の顔を立てねばならず、そのためにカットし、題名を変えたということらしい。

映画を作る側にとって、政治的問題を指摘されるのも困りものだろうが、こういった手続きのことで上映禁止にされるのはもっとやりきれないことだろう。

王小帥も、そんなやりきれなさを払拭し、自身の名作を名誉回復させるべく、12年目の上映解禁を行ったのではないか。前引『騰訊娯楽』「王小帥被禁作品改名《自行車》12年後国内首映」中に出てくる「七月、一起騎十七歲的単車」イベントも、冬春電影によるものであるから、王小帥の意思によるものであろう。

このイベントは、各種メディアが報じている。その中から、『網易娯楽』「高

圓圓騎自行車游北京胡同」[注6]を紹介する。

> 網易娯楽7月8日報道（図文/CPP）北京、7日、映画監督王小帥の発起により、高圓圓らが共に参加したサイクリングイベント「一起騎十七歳的単車」が行われた。これは、宋慶齢故居から出発し、後海一円に沿ってサイクリングするもので、サイクリングを通して、2000年に撮影された『十七歳的単車』のロケ地を再び巡り、多くの映画ファンと相互交流しようというものである。当日、高圓圓は爽やかな服装で自転車に乗り、12年前撮影した映画の胡同を行き来した。

この様子は、テレビでも報じられ、前出『騰訊娯楽』「王小帥被禁作品改名《自行車》12年後国内首映」にもその動画が貼り付けられており、見ることができる。シャオを演じた高圓圓は、リクエストに応えて、ジエンを演じた李濱と共に、二人が付き合うきっかけになった場面を、照れながら再現するなど、ファンサービスに努めた。

このイベントは、直接的には、翌週に予定されている特別上映のためのプロモーション活動である。ただ、特別上映はわずか2日間計2回だけであるから、興行収入が目的とは思えない。目的はやはり『北京の自転車』の名誉回復であり、イベントに集まった多くのメディアがそれを広く世に伝えてくれることを、王小帥は願っていたのであろう。

おわりに

2000年に撮影された『北京の自転車』は、今観ても全く古さを感じさせない。それは、この映画が描き出した4層構造の格差社会が、今も続いているからであろう。いや、今はD層の上に汚職で儲けたE層も出現しているのかも知れない。社会主義国家であるはずの中国で、ここまでの格差が存在することは、大いなる皮肉と言わざるを得ない。

都市の現実を描く第6世代にとって、都市の現実を追求すればするほど、この格差問題にぶつかってしまう。それを最初に、しかも明快に、そして楽しめる映画として撮った王小帥の力量は大いに評価されるべきだと思われる。

王小帥は、この映画を12年後の特別上映を機に、「経典電影」つまり古典にしようとしているのだろう。そもそも、『北京の自転車』には、自転車が盗まれることから悲劇が始まるヴィットリオ・デ・シーカ監督『自転車泥棒』と、一定量働けば人力車が自分のものになるという老舎『駱駝祥子』のモチーフが盛り込まれている。ただ、もとよりそれだけでは古典になることはできない。古典になるには、時間が必要である。つまり、時間を経ても評価され続けなければならないのである。『北京の自転車』も、12年という時間は必要だったのであろう。

［注1］「三都市物語（三城記）」は、三都市つまり北京、台北、香港の若者を描くシリーズで、『北京の自転車』の他、台湾の林正盛（リン・チェンシェン）『檳榔売りの娘～愛你愛我』（中文題『愛你愛我』）、台湾の易智言（イー・ツーイェン）『藍色夏恋』（中文題『藍色大門』）の3本が、その後、台湾の徐小明（シュー・シャオミン）『五月の恋』（中文題『五月之恋』）が制作された。ラインナップされている中国の賈樟柯（ジャ・ジャンクー）『上海宝貝』、香港の余力為（ユー・リクウァイ）『人民找換』はまだ制作されていない。

［注2］ 佐藤忠男編集総指揮『アジアフォーカス・福岡映画祭2001カタログ』2001.9.10 アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会

［注3］ 拙稿「第六世代の主題を読む」『中国近現代文化研究』第4号 2001.12.25 中国近現代文化研究会、拙稿「第五世代の終焉と第六世代の解除―中国映画の転換点―」『コミュニケーション文化論集』第1号 2002.12.10 大妻女子大学コミュニケーション文化学会 等

［注4］『騰訊娯楽』「王小帥被禁作品改名《自行車》12年後国内首映」2013.7.16 UP http : //ent.qq.com/a/20130716/012585.htm 2015/01/05（プリントアウトの日付、以下同）

［注5］『新華網』「王小帥電影被解禁：《十七歳的単車》変成《自行車》」2004.1.2 UP http : //news.xinhuanet.com/newmedia/2004-01/02/content_1257384.htm 2015/01/07

［注6］『網易娯楽』「高圓圓騎自行車游北京胡同」2013.7.8 UP http : //ent.163.com/photoview/00 AJ 0003/503516.html#p=937 KQHH 800 AJ 0003 2015/01/05